

【シンポジウム 難民が開く日本社会ーインドシナ難民の受け入れから 40 年を経てー】

第 2 部 日本インドシナ難民支援の展開

司会 人見泰弘氏（武蔵大学准教授）

人見 第 1 部に続きまして、第 2 部は「日本のインドシナ難民支援の展開」というテーマで、4 人の大ベテランの方々にお話をさせていただきます。1 番目は、さぼうと 21 理事長・元国際赤十字インドシナ駐在代表の吹浦忠正さんから「ベトナム終戦と日本」というタイトルでお話をさせていただきます。

1. 「ベトナム終戦と日本」

吹浦忠正（さぼうと 21 理事長・元国際赤十字インドシナ駐在代表）

吹浦 2 人の若い方が大変立派な学術的なお話をされたものですから、当初考えていた話を全部止めますので、レジュメ関係なしにざっくりばらんな話をしたいと思っております。78 歳でございますので、このベトナム戦争についてはまったく同時代的に生きてきました。つまり、学部を卒業したときには米ソ冷戦の真っ直中。在学中はキューバ危機があり、ケネディが殺され、東京オリンピックがあり、そういう時代。そして大学院の頃には日韓国交正常化といった、非常に大きな歴史的な動きがあったときに、私は育ちました。

ベトナムにはその頃からしきりに行ってございまして、RHQ の親団体であるアジア福祉教育財団の第 1 回目の調査団に、私は最年少で参加したことがついこの間のことだと、本当にそう思っています。それ以来、いろいろな形でインドシナと関わってまいりました。

しかし、1975 年 7 月 30 日にサイゴン……。今、サイゴンと言っても分からない人が多くて困るのですが、今のホーチミンです。難民と言っても分からない人は、じつは昔はいっぱいたったのです。第一、日本語には「難民」という言葉がなかったのです。国語辞典で最初に「難民」という言葉が出てきたのは、昭和 18 年、1943 年の

『明解国語辞典』という辞書なのです。それもせいぜい「困った人」「困った民」「困難な民」。そんな表現なのです。

それはどうしてかという、日本は難民という感じの人を大量に受け入れたのは、結構古い歴史があります。百済が滅んだときなどは大量の難民が日本に来ております。それだって別に困った人が来たのではなくて、先進国の人々が日本に逃げてきてくれたという感じなのです。その後、様々な人がいろいろな形で日本にやってきておりました。

この人たちから日本人は、我々の先祖は習いました。しかしそれをいちいち挙げているとなんですから、『難民：世界と日本』という本を、今から三十何年前に書いていますので、それをご覧いただければと思います。

私は最後に大学の教壇に立ったのは、正式に授業として立ったのは70歳のときです。その前の年に某超有名女子大学で、「日本とアメリカと戦争をしたことがある」と思う人は○、ないと思う人は×、分からない人は△を書けと、無記名でアンケートをとりましたら、なんと21人が「日本とアメリカは戦争したことがない」、12人が「分からない」、63人は「日本とアメリカは戦争をした」と。「じゃあ、君、その戦争した結果、どちらが勝ったか」と聞いたら、19人は「日本が勝った」。「先生、質問です。同盟国がどうして戦争をするのですか」。これは本当の話です。僕は全部証拠の紙を今も持っていますから。それは我が人生で一番ショックだったことの一つです。

「同盟国がどうして戦争するのか」というくらい、多少は勉強しているのですかね。安保条約は知っているぞという人が、そういう質問をするんですね。「じゃあ、君。真珠湾ってどこにある？」と言ったら、「三重県です」と言うのですから。まるで落語の世界なんですよ。

ですから、今皆さんは、割にご年配の方はベトナム戦争を知っているから良いのでしょうけれども、まるっきり知らない、どことどこが戦ったか……。今、指名しませんよ。しっかり思い出してください。誰と誰が戦って、どちらが勝った、どちらが負けた。勝ちも負けも言えないかどうか。いろいろそれは見解があるかもしれませんが。

とにかく1975年4月30日にサイゴンが陥落して、それで戦争は終わりました。それからものの10日もしないうちに日本にボートピープルがやって来ました。これは

久々に……。少なくとも、久々というか、パスポートという制度ができてから初めてパスポートを持参しない複数の外国人が日本にやってきたということなのです。

ものすごい緊張です。ちゃんと港まで数台のパトカーが行って、一切信号を止めないでバーッと来て、アメリカやフランスの飛行機に乗せて終わりという時代がありました。私どもは、これはなんとかしなければならぬと、それこそ冷戦下の人道主義で考えました。

そうやっているうちに、相馬雪香という難民を助ける会（AAR）の創立者、当時 68 歳でしたが、彼女がまったく無手勝流に「難民支援をしたい者、この指とまれ」という形で、始めました。とまったひとりが私です。

しかし、当時の日本の社会というのは、難民支援などということをするのはよほど変わった人か、偏屈の人か、無能力な人とか、落ちこぼれとか、そんなふうに見られていました。NGO なんていう言葉もなかった。ボランティアという言葉がなかった時代です。

でもこれを発表するや、新聞社がいろいろ協力してくれまして、6 カ月で 1 億 1000 万の金が集まりました。ダンボールで現金書留が送られてくるという感動を味わいました。

それはともかくとして、日本政府はどうしたかという、ベトナムからのボートピープル、ラオスからメコン川を泳いで渡って逃げてタイに行った人たち、カンボジアから、バタンバンの方からタイまで歩いて逃げた人たち。こうした人たちに対して非常に冷たかったです。

しかし、そのときにタイの難民キャンプに行きますと、トヨタとか日産と書いてある車がいっぱい走っている。救援物資の大半はメイド・イン・ジャパンです。しかしまったく日本人がいない。そういう状況について、当時、カナダの相馬雪香の友人が、「これはなんだ」という内容の手紙をくれた。その一通の手紙から、この AAR はスタートしました。1979 年 11 月 24 日。いわば 1970 年代のほとんど最後でしたけれども、この会が発足して、今日で満 40 年が過ぎました。

そのときに、これは国会での正式な議論ですから、議事録で皆さんご覧いただければ分かりますけれども、日本が難民を受け入れることは無理だ、人口がこれだけ過密な国で受け入れてどうするんだ、失業率もいろいろある。それから、山地が大部分である国土の地政学的な状況、地理学的な状況、そして寒冷な気候。それから、日本語と

というのは世界で一番難しい言葉なのだという気分。気分ですよ。世の中、簡単な言葉なんて一つもないと私は思っていますけれど。

それから、在日のインドシナ人がいない、リトルサイゴンなんていうのはない。そういうところに来たってその人たちが困るだけじゃないか。第一、日本人は単一民族だから、外国人と一緒に暮らしたことがない。

これは国会で真面目に言われた議論です。今だったら大問題じゃないでしょうか。本音を聞くと「この問題に取り組んでも、吹浦さん、票にならんですよ」というのが政治家の声です。

そういう時代に対して、一番お話がしやすいので、とりあえずベトナムで申しますが、ともに漢文明圏。つまりシナの文明圏の周辺国であって、同じ仏教国で。ベトナム語というのは、なんと7割の単語は中国語から来ているのですね。例えば、なにを言いましょうか。「国語」「クウォック・グー」と言います。そういう調子で、大変分かりやすいです。それから、儒教精神、大変礼儀も心得ていて勤勉です。それから、別に日本に農業をしにこの人たちは来るのではないのだと。山があったって構わないと言いました。それから基本的に価値観が日本に近い。ずいぶん乱暴な言い方かもしれませんが、共産主義ではなくて民主主義というものを国家の基本にしようとしているという姿勢においては、同じ価値観の国ではないか。これを日本が受け入れないということはおかしなことではないかというような議論を、国会議員や外務省、法務省としつこく交わしました。

今日は元大使もいるし、今は東京入管の偉い方も2人、ここにいらっしゃいますので、あまり悪口は言いたくないのですけれども。あの方たちも苦勞したと思います。実際、先例がないのですから。先例がないところが入ってくると、日本のお役所は非常に困ります。それに対して叱咤激励ではなくて、文句注文ばかりつけました。

当時、国際的なことを民間がやるという意識もあまりないです。海外協力するのは青年海外協力隊が1965年にできましたが、あれはNGOではなくてGOです。ガバメント・オーガナイゼーションなんです。100%国の金でやっているわけです。そういうものが辛うじてあったというだけでした。

それに対して私どもは何度も外務省にも通いました。しかし「頼むから難民問題に口出さないでくれ」と。「ほかにやることあるでしょう」という。こんな形で、某有名局長さんに言われました。

しかしようやく外圧がかかってきました。先ほどの人見先生の発表にもありましたように、バードンシェアリングということをしきりに向こうから言われて、「うちの大統領は近く日米首脳会談でこれを出すぞ」とすごまれたりしてね。そうこうしているうちに、東京で先進国首脳会議が開かれる。「そこで話題にするぞ」と言われたらもう大変です。緊張してしまいます。サミットが東京で初めて開かれたときですから。

それと先ほどから話が出たように、成り立ての先進国というか、復活した戦後成り立ての先進国としての市民の妙な意識。日本は経済大国だとか、平和をこれだけ長く維持して、こんなに良い国はないというような意識があったなという思いがしました。そういうことを大いに訴えて、政府・政治家との交渉というか、注文をいっぱい言い続けました。

それから、ODAをNGOを通じて使うべきだと、これもずいぶん働きかけた政策提言の一つです。これも今、だいぶ進んでまいりました。しかし、自分の独自の金がない、好きに使える金があれば、実にやりにくいです、こういう運動は。

今、だいたい20億を超えるAARの予算ですけれども、当初、相馬会長が言っていたのは「1人1円、1億2000万、なんとか欲しい」ということです。標語みたいにそれを掲げてやっておりました。

大きく変わったのは、マスコミの人たちの応援がものすごく大きかったということです。メディアに育てられたという思いがあるくらいです。常にその人たちの関心を受けてやってまいりました。その結果どうなったかというと、先ほどの報告にありましたように、「外国人と日本人との境界線」という言葉を使っておられましたが、それがズレたというのは、私は本当だと思います。実感です。

AARの活動が新聞に出ますと、「君たちはね」と必ず電話が来ました。「日本にだって困っている人が山ほどいるじゃないか」「なぜそう難民、難民と言うんだ」ガチャンと電話を切られることが毎回のようにはありました。そういう人たちとも何度も話し合いました。「私は両方できないから、こっちをやる。あなた方は日本で困っている人の応援をしてくれ」と。詭弁みたいな話ですけれども、そういう対応をしたことも覚えております。

それから、第三国定住に消極的な日本についてです。インドシナ難民のときには、例えばマレーシアのビドン島に日本から何度も何度も調査団が行き、1人ずつ面接して、「この人を連れてくる」「連れてこない」と、健康診断までするのです。健康診

断をして、一家眷属に1人でも大病の人がいると拒否していました。それを解決してくださったのが、この、今いらっしゃっている角崎大使です。当時、外務省の人権難民課長として、何度仲良くなり、何度言い争ったか分からない関係です。

ユ・カンナラちゃんというカンボジア人の4歳の子どもがいました。心室中隔欠損症という、心室と心室の間に穴が空いていて血がうまく回らない病気でした。この子の一家27人が、タイの難民キャンプで日本に行きたいといくら申請しても、ノーと強く拒否されていました。「**We will never reconceder in the future.** (あなたたちのことは未来一切考えない)」と書いてあるんですよ。その紙を掲示板に貼られているのです。「**This is Japan.**」と書かれていたんですね。

そんなところにこちらがボランティアを派遣して活動するなんていうことは無理ですよ。何度も角崎人権難民課長に相談をして、ついに法務省もそれに対して納得していただきました。その結果、AARがどうなっても保障すると説得し、ユ・カンナラちゃんの一家27人を受け入れてくれました。そういう政策提言や政治家に強い注文を出したことは、ほかにもたくさんあり、AARはそうした活動をしてきました。ユ・カンナラちゃんは、その冬に危ないと言われていましたが、手術などに治療も全部、私どもが関係し、27歳まで生きました。

そのような政策提言を大に行い、NGOというものの地位を築いていかないと、非政府団体と反政府団体の区別もつかなかった時代です。これは大変ですよ。私自身「あなたはいつから反政府団体に入ったんだ」「裏切り者め」とまで言われました。対人地雷禁止のことについて取り組んだ時ときにも言われました。『地雷ではなく花をください』という本は、ここに立つ柳瀬房子会長が書いたのですけれども。「女・子供を使って日本の安全保障に口を出すのか」と言われました。「卑怯だぞ」と。自民党の部会で言われたこともあります。

今は法務省の難民審査参与員としてAARの関係者数人が関わっています。ですから、この人たちが仮に一致団結して……。実際、一致団結しないように心がけていますけれども。記者会見でもして、「この人を難民に認定しない法務大臣は冷たい」とでも説明したらえらいことになると思うのですけれども。法務省は、そんなに冷たい役所ではないです。私は散々「冷たい、冷たい」と言ってきて、先ほど言った「難民：世界と日本」には、皆さんに読まれたら困るくらい「冷たい」と非難していますけれども、「じゃあ、あなたも参与員をやってみてくれよ」とある大臣から勧められて難民認定参与員になったのです。そして6年。約300~400人は審査しましたが、

難民認定した人は残念ながら「0」です。1人でも認定したら、私はもう辞めようと思っているくらいなのです。だって、難民支援を目的に掲げる「難民を助ける会」の人間で、「さぽうと21」の責任者なのです。本当に難民の蓋然性の強い人は日本にはわずかししか来ていないのです。またそういう人はすぐ法務省が認定しているのです。ですから、日本が冷たくて認定していないわけではないことを理解してください。

日本という国が、海外広報の段階でいかに知られていない国であるかということ。昔、ベトナムに赴任したときに言われました。「あなたはスズキさんですか、カワサキさんですか、ホンダさんですか、ヤマハさんですか」と。それしか名前がないと思っているんですよ。そのくらいしか日本という国は知られていないということを、私は痛感しておりました。

要するに、日本のNGOはもっと政府と是々非々の関係、親しく是々非々になる関係をつくるべきだと思います。それから政府も、将来、北朝鮮からの大量の難民が出てくるとか、中国、台湾の戦争でもあったようなときにはどうするかということをもっと積極的に準備しておく必要があります。シミュレーションは自由ですから。表現の自由も良いけれども、こちらの自由もしっかり確立して研究しておいたほうが良いだろうということを、私は申し上げて、3時間くらい話したいところを22分で止めさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

人見 吹浦さん、どうもありがとうございました。たしかに日本の民間の団体が国際的な貢献で活動するということは、非常に珍しい時代の中で、一つひとつ作り上げていかれたというお話が非常に印象的でした。ありがとうございました。

お二人目はAAR会長の柳瀬房子さんから「難民を助ける会から見る難民支援の40年」というタイトルです。よろしくお願ひします。

¹ 社会福祉法人さぽうと21 日本国内の難民援を目的として、1992年に「インドシナ難民を助ける会」（現・難民を助ける会）の事業を引き継ぎ、社会福祉法人として設立